



Handwritten Japanese characters in black ink, likely the title or author's name, written vertically on the left side of the cover.

伊5
4461

學大田稻早
館書圖
庫文田內者托寄
號八六第書托寄
號30第
冊第



清江先生
一覽
海記
後
年

全

清江先生
一覽
海記
後
年

門 伊5
號 4461
卷

大正七年九月
丙田 糸子氏 贈

丙田

文化元年甲子

二月十七日 江戸白糸勿比 直子 乙別 外
其ノ須更ノ消生 難ナク 宜シ

書 印 藏

書 印 藏

同 書 印 藏

後元月苗月
至丁大書降
十株皮

三月廿五日 亦升 動 復 替 以 黃 柳 法 鹿 樽
一 付 飯 塚 之 水 齋 院 一 過 之 法 之 實 錄 也
海 神 之 宿 之 沖 波 沖 波 之 宿 之 實 錄 也
種 因 之 宿 之 實 錄 也

白 糸 子 氏 之 實 錄 也

海軍中將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

等樹院 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

六月朔日 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

平野 齋藤實 海軍少將 齋藤實

六卿法 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

七月 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

八月 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實
海軍少將 齋藤實 海軍少將 齋藤實

日本百枚銀元は部... 島庄丹...
志意... 升... 石... 九... 依...

九月七日魯西無人長... 所... の家及... 存...

金子... 表...

日二年乙丑

正月... 東...

八月... 帳...

梅月... 景... 長...

日... 長... 行... 津... 魯... 交易... 多... かん

一月... 長... 津... かん

二月... 長... 津... かん

久の権威... 入久の... 行身... 之... 之...

日三年酉寅

二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

日... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年...

日... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年...

日... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年... 月... 年...

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

日未一日甲月兵人出衆

二月廿一日前夜授手章原國政乃原也
後、松平殿より西殿出此一用、古くは
新祝九子大賜、（？）に上

松平殿乃手通原、（？）家留中、（？）
後、乃石符、（？）後、乃符、（？）
後、乃水、（？）乃、（？）

正月廿一日前夜授手章原國政乃原也
上、乃、（？）乃、（？）乃、（？）

は、（？）乃、（？）

乃、（？）乃、（？）乃、（？）

乃、（？）乃、（？）乃、（？）
乃、（？）乃、（？）乃、（？）
乃、（？）乃、（？）乃、（？）

至、（？）乃、（？）乃、（？）

六月、（？）乃、（？）乃、（？）
乃、（？）乃、（？）乃、（？）
乃、（？）乃、（？）乃、（？）

思物に疾人得業歎く、水代結結為り、
河中に随死を、存救百人、
魯考とて五時格の信原人、
のこるを神の神、

十月二十日、山田村、

リヤ、百舟上には、
高房上、徳海存見を、

日、女、河原、

とあり、

二月十日、

日、十日、
記入の如、
小、
毛、

日、
上、

高柳下五石人宿集一しり物也

三月八日松平政子代親松平金之助
熊野地盤国と常也

四月九日曾与重松津之浦と約定する
子連左中一と云ふ事有也

四月二十日松平金之助と松平金之助と
五月十日松平金之助と松平金之助と
一と云ふ事有也

四月二十日松平金之助と松平金之助と
五月十日松平金之助と松平金之助と
一と云ふ事有也

日次

四月九日松平金之助と松平金之助と
止む事有也

四月九日松平金之助と松平金之助と
十三日松平金之助と松平金之助と
地中事有也

日平本日より他を徳世子八百四十人海平に
おはししし瓶火也十進兵也軍部
受入蘇とてすししし

二月八日金津院二百八人又瓶火也也
全向す

四月七日戸内院とる論新与夫手及魯
知無人上十日法記入の知石法力及石
ししし勤政事第事平石中又東しし中
法と汗龍 沖見しし中石中院法也子
於しとる子馬丸別在法法也中口波し

日九日若お右見しし中備補院并し及室
互別中田浦院海田日とる法用合とる

六月一日中十日とるしとるし及中田
しああし法水

同六月一日中十日とるしとるし及中田
しああ

七月廿五日午刻下中刻十二日午刻
浦賀河川之浦之橋上之橋上河川之浦
之河川之浦之橋上之橋上河川之浦
人多く死すはるるはるるはるるはるる

八月廿五日午刻下中刻十二日午刻
諸國法水

八月廿五日午刻下中刻十二日午刻
諸國法水
諸國法水

八月廿五日午刻下中刻十二日午刻
諸國法水

八月廿五日午刻下中刻十二日午刻
諸國法水

八月廿五日午刻下中刻十二日午刻
諸國法水

幸甚大反活より不し在事本沖の飛
ししと通者し所人取し由り味くは字
不本しといふ洞法しやしは信く通る是傳
らるしと花中列中由り子るは生るる
也と云二月廿百沖流

二月廿百沖流行金財と出ぬと因り十
長月長金財既中比法用と知るるしと
各盡金と大取流と賜人

口亦言より口亦東ていふ亦しはるる

亦も句ていふ亦しはるる

日月仙童人津波と古田津家上草

果田船但別と石願一深流

三月十一日卯未と臨年村放十方石二十
こころは月待はしはるる津波既中と卒就
地筋十と若くしは月待と卒就と卒就
既中と一月しは月待と卒就と卒就
也と云るははははは

日永二百餘年別地家

日永二百餘年

二月廿百餘年別地家の地家
二月廿百餘年別地家の地家

二月廿百餘年別地家の地家
二月廿百餘年別地家の地家

二月廿百餘年別地家の地家

二月廿百餘年別地家の地家

二月廿百餘年別地家の地家
二月廿百餘年別地家の地家

一

賢月より白紙年入金の冊を衆全席に示し、其後
高橋清を名とせしめて新編金律
月上記と曰はれし進状す

日入月入の旨を衆に示し、其後
亦及身升元平と曰はれし及編集の旨の
為衆常々賜ふるに曰はし

一向宗開祖親を法仲遠と云はれしは
小治く、平年よりと仲辨と云はれしは
然り、其親を以て後世に傳はれしは
大仲辨の平年一傑入と云はれしは、其

且保定上人より勅命と云はれしは
法僧といふは、法名ありしこと
向後上人といふは、平年一傑入といふ
事、其年類年自白年併充年等、其
等と祈り、日代法仲清及び其子、其
台命之類、清及び其傳述と云はる

此條、其傳述の旨を衆に示し、其後
其文法を解宗し、其法門を統する
こと、其旨を衆に示し、其後
其旨を衆に示し、其後

東海江福並其行及上徳市法相様ふし
法王樹丸長子と次子一人多し
死之寸刻別し早船深及と多し

十月一日百廿八日

二月一日百廿八日
一人所し百廿八日

三月一日百廿八日
吾中廿廿八日

本一人ふす

日廿一日百廿八日

日廿七日百廿八日
去月一日百廿八日
海子夏一横若路傍
園立殿寸一末

日七十年

正月朔日使渡公入此者連了止む

日百口之及不熟因人雷横

二月廿六日初年終中... 命

八月廿七日... 命

... 命

... 命

... 命

政原...山林樹木...頃倒す

同日二月廿七日寅刻...東原北原

日八年...末

寅刻...百五刻...東原北原

日廿五日午刻...辰刻...東原北原
...鳥城...
...頃刻...
...頃刻...
...頃刻...

の...見...後...頃刻

二月二十日午刻...辰刻...東原北原

三月...辰刻...東原北原
...辰刻...
...辰刻...
...辰刻...
...辰刻...

七月...辰刻...東原北原

文化九年壬申

三月廿九日、東洋信託銀行、
長崎支店より、長崎商人、
野田、と、長崎、と、
野田、と、長崎、と、

四月六日、東洋信託銀行、
長崎支店より、長崎商人、
野田、と、長崎、と、
野田、と、長崎、と、

なすり及びその人の波江と云ふて不事天
情を及ぶる事なり

八月廿六日午未刻より江戸に在りて後日可
く旅人の指を江音院に於て旅人の事
く旅人の事なり

九月三日午未刻より江戸に在りて後日可
く旅人の指を江音院に於て旅人の事
く旅人の事なり

二月廿七日午未刻より江戸に在りて後日可
く旅人の指を江音院に於て旅人の事
く旅人の事なり

日十年奏有

二月廿七日午未刻より江戸に在りて後日可

二月廿七日午未刻より江戸に在りて後日可
く旅人の指を江音院に於て旅人の事
く旅人の事なり

三月下旬より翌年へは海島探検の日々
ありしと公認されたる。この頃より
居すところより一里ある山奥まで
~~~~~ 家母と母丹陽と母と合つて  
江戸中の巷籠り書と合つて居す  
~~~~~ 家~~~~~

六月廿八日同郷某院にて夜更に書居る
時付ありしとある所 上巻ありし
年圖にありし

八月廿九日卯中別はる光也某のりか
ありしとある所

二月九日卯中別はる光也某のりか
ありしとある所

今年江戸中某所へ所人たれは治丹
ありしとある所

日一二年甲戌

身は七白を己に別するの如く霞月を己に別して
二塔と海と一なる也亦今よりとあり紅塵
空より満く眼目に入ると人成道に迷ふ
日十日午下別霞月入起紅塵空より満く
日月二白を對馬と云ふは在國城増及法地
多々明大と流るる今よりとあり紅塵空より満く
けり未別は己に別する

霞月二白を對馬と云ふは在國城増及法地
多々明大と流るる今よりとあり紅塵空より満く
けり未別は己に別する

夏節より秋節
一人早稲

七月廿六日
七月廿六日

永く世を安んずる

二月廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
及く こと 人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸

口三年乙亥

四月廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸

六月廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸

九月廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸
勤者 七月 廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸
勤者 七月 廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸
勤者 七月 廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸

勤者 七月 廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸
勤者 七月 廿日 申すに 七月 春の こと かく 江戸
人の 苦痛 なる こと かく 江戸 こと かく 江戸

七月幾月 雄飛東海道 船經湍水田島
多夕夜事

八月十一日 夜古三原之殿 現合衆 上工并
大炊願宅上 婦之山三原之莊 更及後位
上三原上之 梅光、野中 之村、由之氣
宗光及家臣人 傳地位 出令 一 一
始末由得 一 一 一 一 一 一 一 一
日光寺法會 一 一 一 一 一 一 一 一
遠國 渡舟 一 一 一 一 一 一 一 一
月日 一 一 一 一 一 一 一 一

十月十一日 秋日光 一 一 一 一 一 一 一 一
形 一 一 一 一 一 一 一 一

十二月廿日 宗利 一 一 一 一 一 一 一 一
和別 一 一 一 一 一 一 一 一

十二月廿日 百歳田 一 一 一 一 一 一 一 一
信 一 一 一 一 一 一 一 一

至りし事、東白河野原に於て、人爲らば、
原の東家と改刻す。此月、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

九月、九日、家對して、
出入送來、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

日、五、百、事、
初進、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

十月、百、己、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

二月、百、己、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

日、百、己、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

日、百、己、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

日、百、己、
至りし事、東白河野原に於て、
人爲らば、原の東家と改刻す。

月廿七日 升上内多正南ホナマ 高橋より本より
上流より流収 所中いふ所知命よりより
とて市地と見やるといふは 陸道より
元正南は内席の友なりが中飯より取
海子に作 師中農家よりより 月より一
正南 穀より穀云々 西より文より
月よりいふ思ひなりと云ふは 正南より
正南 穀より取て農家よりいふは 人
よりいふは 師中農家よりいふは 人
師中農家よりいふは 師中農家より
正南 穀より取て農家よりいふは 人
よりいふは 師中農家よりいふは 人

今日手にて之を温暖す 勿月中より云々

日一廿年丁丑

正月十九日 山石監場所 類聚書中より後取
御上よりいふは 師中農家よりいふは 人

日一廿年丁丑

二月廿七日 高橋より本より

湯純田中園新 中陸十一年...
煥...
此乃新...
...
...

二月...
...

八月...
...

江戸及越田ノ界
...

六月...
...

日十日卯...
...

日...
...

七月...
...

江ノ上ノ至人ノ為

九月丁酉日小笠原之殿（意旨）御所北ノ方有津之
所者本姓ノ方有里ノ形御所ノ内 遠ノ別御所
井ノ上ノ内ノ正南 遠御所ノ 別御所ノ 上ノ所
留ノ旨ノ 御所ノ

諸尼村無知重別浦御所ノ御所

二月廿日東ノ別御所ノ御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ
御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ

御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ
御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ

文政元年戊寅

御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ
御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ

御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ
御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ 御所ノ

徳流りしめ日の後に沈みぬ
流るる波もよき波もよき
六月の申月よりいへる書お

日十日の如くはるる雨も
日十日の如くはるる雨も

五月の如くはるる雨も
及とて雨もよき雨もよき
仲とて雨もよき雨もよき

大旱の如くはるる雨も

八月の如くはるる雨も

日七の中申月よりいへる書お

五月の如くはるる雨も
はるる雨もよき雨もよき

十月の如くはるる雨も
はるる雨もよき雨もよき

日本百江漢日と殺死、子七、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一月八日暮、乃、下、在、中、以、下、及、び、く、と、因、
以、雪、降、

二月、百、少、老、云、原、之、風、及、高、原、中、列、嶺、
川、谷、之、地、母、中、及、秋、之、多、冬、之、亦、之、名、
姓、東、之、所、極、之、年、之、の、ら、た、久、保、の、候、
役、者、之、由、方、之、候、ま、さ、し、

日、廿、八、九、百、一、十、子、之、論、之、口、之、及、之、
之、所、之、也、之、以、因、之、別、之、也、之、り、
之、也、

文政三年乙卯

夏月一日伯列以橋本系所浦朝科一人
隱者す

りし音水戸殿より人日本史字一人再
以使と進致す

日中音江戸及と國人雷降進致不正

後とて大北とす

二月朔日より明別道より陸境迄の宿舎
長を尋りて同宿舎に人解あり

四月九日肥前国海原に龍宮さまより使女
津江作云人血跡の立上見しと云
コロリと云人血跡の立上見しと云
死すす一江津の通人し歎す
我輩と云見しと云
津江津江の邊と云一宿舎に宿す

一宿舎に宿す

四月九日午刻より明別より西へ江津宿
川邊に宿す

六月八日申刻迄の宿舎に宿す
一人と云あり

六月七日申刻迄の宿舎に宿す
將軍の家
古く將軍の家と云あり

日下百未列之東林天江海舟之遠望也

日下百未列之東林天江海舟之遠望也
九月廿一日

西月中旬
詔國一人早

七月初旬

九月初旬

九月廿八日

九月廿八日

九月廿八日

波一高華の行を云々初と云ふも其意
然し世に日月如同席と云ふは
作也

日三年庚辰

日月如白丸月如白丸温暖るる
日月如白丸月如白丸温暖るる
日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる
日月如白丸月如白丸温暖るる
日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる

日月如白丸月如白丸温暖るる

徳生翁人好美日也

日一廿日秋言別江戶地着

日五廿日江戶中の東海之辰
上流一神海及十左飯荒和申汁満
歳臣神

二月三日秋言別江戶地着

日一廿日秋言別江戶地着

龍岡法水龍龍

六月廿日申別江戶地着
雷由在原少の年上河

日一廿日春別江戶地着
山果之西

二月廿五日 東國の四年 船中
日記

二月廿六日 自國船中 船中 日記
日記 船中 日記

二月廿七日 自國船中 船中 日記

二月廿八日 自國船中 船中 日記
船中 日記

二月廿九日 自國船中 船中 日記

三月一日 自國船中 船中 日記
船中 日記

三月二日 自國船中 船中 日記

三月三日 自國船中 船中 日記

三月四日 自國船中 船中 日記

宿務有之 庶半の法に任事人と
實効すし云々 世にりては物産の盛衰も
多し 慮況しつゝ

三月二日 夜更に 物産の盛衰も
及くとも 人の苦難

りし二日 二回に 夜更に 物産の盛衰も
及くとも 人の苦難

日中百子別世人の表

日中百子別世人の表
日中百子別世人の表

日中百子別世人の表
日中百子別世人の表

日中百子別世人の表

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

二月廿七日 正月廿八日 正月廿九日

雲中一辭卷有之出射子時味なり

六月下旬より西月まで東国へ早稲
苗を移植す此より日本早稲の栽培
地帯と云ふも流しなりとも早稲の
栽培と云ふなり

七月、百回宗叔入京路迄之と書あり

八月、百回宗叔入京路迄之と書あり
雷あり

九月、百回宗叔入京路迄之と書あり

十月、百回宗叔入京路迄之と書あり
十一月、百回宗叔入京路迄之と書あり
十二月、百回宗叔入京路迄之と書あり

正月、百回宗叔入京路迄之と書あり
二月、百回宗叔入京路迄之と書あり

三月、百回宗叔入京路迄之と書あり
四月、百回宗叔入京路迄之と書あり

石の雷鳴

日七有夜去別はく重なる人あゝ電降る

二月一日本世出好る法動切法は路一丁名上
馬

日五有己別より深味月人上煎煎塵網
てし偏り

二月一日秋世平別は深味也春

日七有夜有と舞る舞度版来此之世以本
形有子と志願也。とありて世は格別と
思ふと次は秋の如く版来心一月五馬と
はは世と

日七有夜有子別は電鳴大車

日七有夜有夜有月人上煎煎塵網立し満

日七有夜有夜有月人上煎煎塵網立し満
如別は春時
年家
平如春有夜有月人上煎煎塵網立し満

日食公秋江記心後

日食年二午

八月七日卯刻人雷降續

日食一日辰刻日暈年重西傍一江以
想寸已刻一とてく降す

日食二日辰刻より日食九日とてく果般史也
人出者百五十分度と光年と追追宗の

此中より大端と云ふと一と上煙雷降轟轟
界は通隔一と大光を上と照耀一と
人地島初寸と聲す粒子のとと者く人氏
人下聲す怖す解月半句とて

二月廿日卯刻江林心後

三月二日未刻より日食一人と雷馬一人と
人電降の雷麻布と云所は京田とて
有る申申刻とてとて流る姑く聲す初降
凡九島とて雷
是とてとてとて

三月廿一日 己卯 日未及東國船之旬月
多烈トク樹本と強の申列と云し止む不

日廿一日 壬午 船政一丁百石 渡加崎 島嶼

廿月廿一日 癸未 籍尾村 無船 島嶼 浦原
沖ノ深 大木村 日公帆

廿月廿一日 甲申 島嶼 一丁百石 渡加崎 島嶼
島因 森島 渡水 島嶼 渡水 島嶼 渡水

廿月廿一日 乙酉 島嶼 一丁百石 渡加崎 島嶼
流 一丁百石 洋澄 一丁百石 渡加崎 島嶼
渡加崎 島嶼 一丁百石 渡加崎 島嶼
島嶼 渡水 島嶼 渡水 島嶼 渡水 島嶼 渡水

日廿七日 申 別 日未 地着

日廿七日 辰 子 別 日未 地着

日廿七日 巳 申 別 一丁百石 渡加崎 島嶼
島嶼 渡水 島嶼 渡水 島嶼 渡水 島嶼 渡水

十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日 十月五日申中刻 月日画 未

日廿六日水人音 廣訓之類
日廿七日水人音 廣訓之類
日廿八日水人音 廣訓之類
日廿九日水人音 廣訓之類
日三十日水人音 廣訓之類

六年亥末

二月二十日水人音

日廿一日水人音

二月二十日水人音

日廿二日水人音

二月廿三日水人音
二月廿四日水人音
二月廿五日水人音
二月廿六日水人音
二月廿七日水人音
二月廿八日水人音
二月廿九日水人音
二月三十日水人音

此別如法心淨故下由狂障起

六月七日教本會也

日五下九有日珠之上有日月之門

五月也人水則如海島如也海島人水海島

人位國家一於之格宛然之乃也

七月七日四法之善以高麗生別也

不假也 也

日一有中日之成則其之乃人番

少自也年可也何也乃也

日一有中日人番乃也

日一有中日之成則其之乃人番

少自也年可也何也乃也

日一有中日之成則其之乃人番

日一有中日之成則其之乃人番

日一有中日之成則其之乃人番

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

日一九月廿七日卯時辰

此等は馬家二四七号と
眼紅手候と云々相候は年々

二月百餘年迄は堂殿に
成りて後後也入多中候
洋信は 江戸

日方高利次への書付に
其方へ申すは書付一併
御覧候

日中各處に於ては
形り申すは御覧候と
書付申す

日中各處に於ては
形り申すは御覧候と
書付申す

京師東北諸國麻痺流行

日七年甲申

京師東北諸國麻痺流行

日中各處に於ては
形り申すは御覧候と
書付申す

進致守白浪一及洋航寸

當云江反之國麻移流竹
臨朔二月體
江野洲意有書

二月廿九年月江野洲表

口亦日新吹勿係通國好

口亦外新吹勿係通國好

三月廿六日申中中列人江東方一見寸
西野山

三月申勿分月一見寸江野及龍岡月水
人下流切寸

三月廿六日申中中列人江東方一見寸
西野山

口亦外新吹勿係通國好

口亦外新吹勿係通國好

今年之月不...
之水心...
...

日...
...

日...
...

日...
...

七月...
...

日...
...

日...
...

日...
...

以百有餘人... 公使... 文...

日... 乃... 思... 且... 宜... 古...

以... 十... 國...

日... 年... 月... 日...

日... 乃... 且... 宜... 古...

日... 乃... 且... 宜... 古...

十月二十日 秋分 晴 風 涼 爽 也

十一月十二日 秋分 晴 風 涼 爽 也
知多 風 涼 爽 也 涼 爽 也

同八年乙酉

十一月十八日 晴 涼 爽 也

十二月九日 秋分 晴 涼 爽 也

正月廿一日 林肥 後 涼 爽 也
高 涼 爽 也 涼 爽 也

二月廿一日 晴 涼 爽 也
陰 涼 爽 也 涼 爽 也

三月廿一日 晴 涼 爽 也

四月廿一日 晴 涼 爽 也
五月廿一日 晴 涼 爽 也
六月廿一日 晴 涼 爽 也
七月廿一日 晴 涼 爽 也
八月廿一日 晴 涼 爽 也
九月廿一日 晴 涼 爽 也
十月廿一日 晴 涼 爽 也
十一月廿一日 晴 涼 爽 也
十二月廿一日 晴 涼 爽 也

日毎の月半別はたをぬきまらりやの
おりのすたえ地と無す

日毎の月半別はたをぬきまらりやの

仲まよりまきまらりやの東国森あは
たのあまらり

八月廿日別はたをぬきまらりやの
あまらりやの東国森あはたの
江まらりやの

八月廿日別はたをぬきまらりやの
あまらりやの東国森あはたの

八月廿日別はたをぬきまらりやの
あまらりやの東国森あはたの

八月廿日別はたをぬきまらりやの
あまらりやの東国森あはたの

十月廿日別はたをぬきまらりやの
あまらりやの東国森あはたの
あまらりやの東国森あはたの

後深公人并相繼一四〇二子五十九人
女子二百九十九人極死す

日向中河江人地著

二月十一日暮方より日暮る迄物集お
より西もこ天并直る

三月廿七日及一廿九日命もあまのり
臣貴女没し一方衆とて一伝く古伝書も
及取次方らむを伝行及一長伝書料物

大遠路あり

日向百廿七日及表別人書



